慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ありがとうの力
Sub Title	
Author	美内, すずえ(Miuchi, Suzue)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2011
Jtitle	人間教育講座 : 社会を知る自分を知る自分を育てる (2011.) ,p.219- 256
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20110000-0219

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ありがとうの力

漫画家

美内　すずえ

みうち・すずえ　一九五一年二月二十日生まれ。大阪府出身。一九六七年、「山の月と子ダヌキと」で集英社『別冊マーガレット』で金賞を受賞し、十六歳で、高校生漫画家としてデビュー。以後、「13月の悲劇」「はるかなる風と光」「妖鬼妃伝」等、次々に意欲作を発表。一九八二年には「妖鬼妃伝」にて、講談社漫画賞を受賞。一九七六年から代表作である「ガラスの仮面」（白泉社）の連載を開始。この作品は、一九九五年に日本漫画家協会賞優秀賞を受賞するなど、各界から絶大な支持を受け、現在までにＴＶアニメ化、ドラマ化、舞台化もされている。

はじめに

はじめまして、美内すずえです。今日はみなさんにお会いできて本当に嬉しく思います。こんなふうにいろいろな方々とお話しできる機会はなかなかないので、この後の質疑応答では何でも聞いてください。

私は『ガラスの仮面』という漫画を描いてもう三十五年になります。連載を始めたのが二十四歳の時でした。というと、年齢が分かってしまいますね。本当に長い連載のなかで、読み始めてくださった方は大人になり、サイン会にお子さんを連れて親子でいらっしゃるようになりました。お母さんが読んで、今度はお嬢さんが読んで、そのうちもう何年かしたら、今度はお孫さんを連れて来られるのではないかと思っております。一人の女の子の成長物語をこれほど長い間愛して読み続けてくださっている読者のみなさんに本当に感謝しています。

今日の講演には「ありがとうの力」というタイトルをつけさせていただきました。どうしてこのタイトルにしたかというと、私自身、いろいろなものに対して感謝することがいっぱいで、その感謝することに素直に向き合った時に本当に大きく運が開けてきたような気がするからです。

漫画が悪書だった少女時代

まず、私自身の漫画家としての成り立ちについて少しお話させてください。

私は、終戦から六年経った昭和二十六年、兵庫県に生まれ大阪で育ちました。日本がまだまだ貧しかっ

た頃で、子供の唯一の娯楽といえば漫画でした。当時は『鉄腕アトム』などの漫画が全盛期だったのですが、漫画は悪書とされていて、「漫画を読むのは悪い子」といった風潮が社会全体にありました。

当時、学校ではどういうことが起きていたかというと、今では信じられないと思うのですが、歴史の教科書に載っている「焚書坑儒」のようなことが行われていました。昔、新しい権力者が権力の座につく時に、その国の歴史や大事なものなどをみんな焼き尽くしてしまい、新しい国作りをしようとした「焚書坑儒」があったとされていますが、実はそれとまったく同じことが当時の小学校の校庭で行われていたんです。家から漫画本を全部持って来いと言われ、持ってきた漫画本を校庭に集めて全部燃やしたというような時代でした。信じられませんね。今、そんなことをしたら校庭がどれだけたいへんなことになるか（笑）。たとえば『週刊少年ジャンプ』だけでも毎週何百万部と刷っていますから、そういった漫画本の量だけで校庭が埋まってしまうくらい、たいへんなことになると思うのですが、昔はそういうことが平気で行われていました。しかも、その漫画を燃やす人たちが漫画を読んだうえで悪書と決めていたのならまだいいのですが、読みもしないで勝手に悪書だと決めつけていたんですね。それを見ながら、私は、漫画家のなかには本当にいいものをめざしている人たちもいるのに、本当にもったいないことをしているなと思っていました。

漫画家になると決めたきっかけ

私は単行本一冊まるまる暗記してしまうぐらい漫画が好きだったものですから、悪書と言われようと、

どうしても漫画を読みたいと思っていました。とにかく娯楽が少なかったうえに、物語の世界が大好きだったせいもあって、家の近所にある五、六軒の貸本屋さんに頻繁に通って、漫画本を読んでいました。一冊五円くらいだったのですが、毎日何十冊と読んでいたので、当然お小遣いでは足りなくて、ほとんどは立ち読みでした。立ち読みしながら漫画のページを全部覚えて、その覚えた漫画を授業中に頭の中で読んで楽しんでいたのです。それでも大好きな作品は、やはり借りて読んでいました。

ところが十歳の時、一番よく行っていた貸本屋さんのおばさんがうちの母のところにやってきて、「おたくのお嬢さん、今月はこれだけ本を読みましたよ」と請求書を出したんです。貸本屋さんのツケがたまりすぎたんですね。「しまった！」と思いました。当前ですが、うちの母親は怒りました。学校でも、漫画を読むな、持って来るなという風潮の時ですから、母親からは「絶対に漫画を借りるな、読むな。漫画を読んでいたらお小遣いをあげない」と漫画禁止令を出されてしまったんです。

困った私は「さあ、どうしよう」と。私がすごく真面目な子だったら、親の言うとおりにしたのでしょうが、読みたい気持ちの方が勝っていたんですね。どうしても漫画を読みたい。だけど読めない。じゃあどうやったら読めるのだろう。その時、ひらめいたんです。そうだ！　だったら自分で描いて自分で読めばいい！　って。そう思ったのが、漫画を描くきっかけでした。

つまり自給自足です（笑）。当時十歳でしたけど、足りないものは自分で作る、欲しいものは自分で手に入れればいい、と思ったんです。初めての漫画は、白い無罫のノートに笑える漫画と、ちょっとシリアスで悲しい漫画、そして怪奇漫画の三部作をいきなり描きました。いきなりのストーリー漫画です。でもそれまでに本をたくさん読んでいたので、物語づくりのノウハウのようなものがたぶんどこかに

入っていたんでしょうね、いきなり描いたその三部作はクラスメートたちに読んでもらったところ大好評でした。つまり十歳の時に読者ができたわけで、それはとてもありがたかったです。クラスメートに好評だったので、また描こうと思い、そんなかたちでどんどん描き続けていました。

小学校五年生の時だったと思うのですが、夏休みの自由課題に先生が何でもいいから持って来いというので、漫画しか描いていない私は漫画のノートを持って行ったんですが、すると、先生が「美内、おまえ、漫画家になるのか?」とひと言言ってくれました。そのとき、「そうだ！　大好きな漫画を描いて、大好きな漫画を読めて暮らせるのだったら、こんなにいいことはない」と思って、漫画家になろうと決心しました。これが、私が漫画家になろうと思ったきっかけです。

それからせっせと好きな漫画を描いていました。うちの親もまさか内緒で隠れてこそこそと漫画を描いているとは夢にも思わない、いやちょっとは思っていたかもしれませんが、文具用品を買うと言うとお金を出してくれるので、ノートや鉛筆などをせっせとねだって隠れて漫画を描いていたわけです。

中学二年の時のことです。クラスメートや他のクラスの人たちのなかに私の漫画のファンができていました。ちなみに私の世代は同級生の人数がとても多かったんです。終戦直後は、産めよ増やせよといった時代でしたから、子どもの数が非常に多くて、一クラス五十人前後いて、そういったクラスが一学年に二十クラス近くありました。そのクラスごとに私が描いた漫画が回って行くわけです。

ある時、隣のクラスの先生から職員室に呼び出しをくらいました。何だろうと思ったら、どこかのクラスで生徒が授業中に私の漫画を読みふけっていて、先生に取り上げられたらしい。焚書坑儒のこともありますから、「やばいことになった」と。でもしようがないからあやまろうと思って職員室に行きま

した。呼び出したのは国語の先生で、「他のクラスの生徒がこんなの読んどったぞ。描いたんはおまえか!?」「すみません」「とにかく今回は返すから、まあ注意しなさい」という感じで、思った以上にあっさり許してくれました。ほっとして漫画を描いたノートを持って帰ろうとしたら、先生に呼び止められて、「美内、この続きはどうなるんだ?」と（笑）。先生も読んでくれていたんですね。ひとりでも味方にしたらこっちのものです。それ以降は堂々と描くようになりました。

デビューできなければあきらめる

ただ、やはりそういう時代ですので、親も娘が本当に漫画家になれるかどうかと心配するわけですね。高校生になると、「この子は漫画家になりたいと言っているけれど、一体どうなるのだろうか」と常に心配していました。これはなんとかしなきゃいけないな、と思って、高校一年の時に母親と約束をしたんです。それは、高校二年の十二月三十一日までにデビューできなかったら、その時には就職か進学かどちらかを考えるから、それまでは自由に漫画を描かせてくれ、というものでした。一種の賭けをしたわけです。

よく考えると、そんな年齢で経験も少ないのに、果たして漫画家になれるだろうかと普通は思うはずでしょう? だけどなぜか自分は絶対に漫画家になれると本当に信じ込んでいて、微塵も疑っていなかった。この「微塵も疑わない」という信念のようなものが自分を助けるんですね。うぬぼれもあったかもしれませんが、きっとなれるとどこかで信じていました。そして、高校二年生の夏に投稿した作品

が、集英社の『別冊マーガレット』の当時始まったばかりの「別マ少女まんがスクール」で金賞を受賞して、その年の秋にデビューが決まりました。まだ十六歳でした。とても嬉しかったのは、これでもうこそこそ隠れないで堂々と漫画を描けることでした。デビューしたことよりそっちの方が嬉しかったですね。「これでもう親に何も言わせないぞ」って。それまでは反対したり、怒ったりしていた父親も嬉しかったんでしょうね。私のデビュー作が載った別マを十冊ぐらい買い込んで、父がやっていた床屋のお客さんに配っていました。

そんなことがあって、今まで反対していた親たちが一生懸命応援してくれるようになって、漫画家生活がスタートしたんです。それ以降、漫画家としては人に恵まれ、雑誌に恵まれて順調な人生を送ってきたような気がします。自分自身は案につまったり、締切に苦しんだり、人間関係に悩んだりと、順調とは思えないことがいっぱいあったのですが、今振り返ってみると、ああ、なんて幸せな漫画家なのかと、しみじみ感じています。

デビューして消えていった漫画家たち

デビューしてから四十四年間、日本の漫画の世界でずっと生きてきて、この世界を見つめ続けてきました。漫画賞の審査も何度もやりました。こうした審査の中ではとても才能のある人がたくさん出ましたし、「原稿を見てください」と直接私のところに持ってきた方の中にもすばらしい才能の方が何人もいました。この四十四年間、私などよりも遙かに感性がすばらしい、絵がうまい、そんな人たちがたく

さん出てきたのです。でもその中の圧倒的な数の人たちが、今は日本の漫画界にはいません。どの本を見てもいないんですね。

ほんの少しだけ残っています。一時私のアシスタントをしてくれた、くらもちふさこさんや酒井美羽さんなど、もともと才能があって自分が表現したいものをちゃんと持っている人たちは今も残っています。そういった人たちはアシスタント時代も本当にしっかりしていて、ガッツがありました。また漫画家をめざしているアシスタントさんの中には、この先生から何かを盗んでやろうという気持ちが大きかったり、いいものをどんどん吸収しようという人たちがいて、実際多くの人がデビューしました。でも、アシスタントからデビューした人の中で残っている人は、ほんのひとにぎり。デビューして何年かしては消えていった。あるいは別の雑誌にかわって、それからまたいなくなった。なぜなのだろうなぁとずいぶん考えました。

「美内ちゃんは花じゃなくて……」

私の漫画を読んでくださっている方は分かると思うのですが、私の場合、少女漫画にしては絵がちょっと地味なんですね。デビュー当時の少女漫画界では華やかな絵が大流行していて、主人公のアップのバックにはきれいなお花が当然咲いていなければいけないというようなこともあった時代でした。ですから、少女漫画の雑誌を選んでデビューしたのに、自分の絵が地味だということはコンプレックスでした。一生懸命に描いていましたし、読者アンケートの結果はすごくよかったのですが、やっぱ

り「私の絵ってどこか少女漫画にしては地味なんだよね」と思っていました。

同じ雑誌に描いていた作家さんで、とても人気のある、チャーミングでかわいい絵を描く方がいました。彼女は私より一ヶ月先にデビューしたので、ほとんど同期です。ライバルだけど友だちという関係だった彼女が、ある日、旅館にかんづめになって原稿を描いている私のところにやってきて、ぽそっと言ったんです。「美内ちゃんは花じゃないね」と。

その頃、私が描いていた雑誌には人気のある若手作家が三人いて、一人は絵が清楚で白百合の花に、もう一人はチャーミングで可愛い絵がチューリップの花にたとえられていました。三人目が私だったのですが、なにしろ自他ともに認める地味な絵柄で、コンプレックスを抱いていましたから、何の花にたとえられるのか見当もつきませんでした。話し始めたライバルかつ友人はチューリップにたとえられていたのですが、その彼女が自分たちの事を話し出したのです。「三人のなかで、自分の絵柄や雰囲気はチューリップのようだと言われていて、もうひとりの〇〇さんは、清楚できれいな白百合のようだと言われてるよね」と彼女がそんなことを言うものですから、え、私は？　どういうふうに評価されているのかな、と、ドキドキしながら彼女の言葉を待っていたら、ぽそっと「美内ちゃんは花じゃないね」と言うんです。「え⁉」とショックですよね。でも彼女は続けて、「花じゃないけど実だね」と言ったんです。

花は美しいけれど見るだけで、そのうち枯れて散っていく。実は美しくはないけれど、食べると栄養があり、味もあります。「実だね」と言われたひと言が、まだ二十歳前だった私にはすごく嬉しくて、「ああ、そうか。私の絵は地味だけれど、それにこだわらなくていいんだ。多くの人の肥やしになれるような、

できるだけでっかい実になってやろう」とその時決心しました。

で、華やかな絵を無理して描くことより、読者が本当にどきどきするようなおもしろい漫画を描いていこう、と自分の目指す方向を決めたんですね。まあ、絵はちょっと地味かもしれないけれど、読者をどきどきさせることは、ある意味、自分の本領かも知れないと思いました。「漫画を読んでくれるひとが夢中になって、絶対にページの途中で漫画を置かせてやらないぞ、そういう漫画をめざそう」と決心したのです。たとえば、私が子どもの頃、漫画を読んでいる最中に、お母さんから「晩ご飯だよ」と呼ばれて、でも漫画がおもしろくて、「うーん、分かった」と返事をしながらも、そのページをめくる手を止められないことがよくありました。そんな漫画を描いてやろうと思ったわけです。読者が「ご飯だよ」と言われて、ぱたっと途中で本を置いて、ご飯を食べに行ってしまうような漫画は描かないぞと今も思っています。

ですから、漫画家が描く漫画には、その人が生きていくうえでの自分の生き方などいろいろなものが反映されているわけです。そういうところをじっと見ていた編集長からは「あなたはスポ根みたいな漫画を描けばいいんじゃないか」とよく言われました。『ガラスの仮面』の連載を始める際には、スポ根ではなく演劇をテーマにした漫画にしたのですが、生きることにひたむきな女の子というベースはスポ根と共通していますし、原稿の中で一生懸命に三十五年間生き続けてくれたような気がします。

周囲の人に感謝し大切にする

私に「美内ちゃん、あなたは花じゃなくて実だね」と言ってくれたチューリップの作家さん、それから白百合と評されていた作家さんたちふたりは、今はもう漫画界にいません。チューリップさんは結婚からまもなく、白百合さんは結婚してしばらくは仕事を続けていたのですが、子育てや家庭が忙しくなって漫画家を辞めてしまいました。もったいない限りですよね。まあ、人生で何を大事にするか、人によってそれぞれなので何とも言えませんが。

また、素晴らしい才能をもって第一線で活躍していながら、いつの間にかいなくなってしまう漫画家さんもたくさんいるんです。どうしてだろうなと、ある時振り返った時にひとつの答えにたどり着きました。みなさんも社会に出てからきっと実感することがあると思いますが、人間は人とのかかわりの中でしか生きられないんですよ。そして、まわりの人を大事にする人だけがある意味、成功の道をたどれるような気がします。私もいろいろな方にお会いしますが、経済界をはじめとした各界のトップと言われる方々はみなさん腰が低いんですね。ものすごく謙虚です。だから、威張っている人は実はあまりたいしたことはないかもしれません。心から丁寧に、にこやかに穏やかに頭を下げてくれる会社のトップの方たちに会うと、ただ者ではないぞと、私は思っています。

それはどうしてかと言うと、そういう人たちは自分ひとりでは何もできないことをよく知っているんです。だからまわりに感謝することができる人たちです。私も自分ひとりで本を出すことはできません。一生懸命にアイディアを練って漫画を描いていますが、それを手伝ってくれるアシスタントさんたちが

います。まずそのアシスタントさんたちに、「ありがとう、よく私に付き合って三日も徹夜してくれるね」と感謝しています。それから打ち合わせをしたり、原稿を運んでくれたりする編集さんがいて、印刷所さんがいます。

私は原稿を仕上げるのが本当に遅くて、出版社泣かせ、印刷所泣かせだとよく言われます。もうかなり昔の事ですが、何人かの編集さんが待ちかまえていて、描き上がった原稿から持って行くのですが、最後の二枚を残して編集さんの手が足りなくなり、しかもその二枚を夜中の三時までに製版所に届けないと、期日までの出版に間に合わないというようなことが何度かありました。そんな時には、自分で持っていくんです。何日も徹夜していて体力的にはもうふらふらで、でも原稿を落すわけにはいかないので、真夜中の三時〜四時頃に、最後の二枚を持って、飯田橋の製版所までタクシーで届けました。製版所には日中はもちろん社員がいるのですが、夜中ですからもう誰もいません。そのかわりに、社長さんや社長さんの息子さんが待っていてくれました。私が「待っていてくださって、ありがとうございます！」と言ったら、怒るどころか、「たいへんでしたね」と声をかけてくれて、「お気をつけてお帰り下さい。後は僕たちの仕事ですから」と言ってくれました。その時は救われたような気持になって、心からありがたいと思いました。

そして本当に嬉しいなと思ったのは、「前回、おもしろかったですよ」と言ってもらえたんです。「僕たち、今回、続きを読むのを楽しみにしているんです」と言って、原稿を受け取ってくれたんです。いや、本当にありがたくて、ああ、もっと喜んでもらえる漫画を描こう、と思いましたね。こうした「ありがとうございます」が長い間、自分の中でどんどん大きくなっていきました。今は出会う人一人ひと

りに「ありがとうございます」と思いますし、こうやってみなさんとお会いしていること自体にも「ありがとう」という気持ちがあります。

運勢を開く「ありがとう」

ここが本当に大事なのですが、私たちは本当にひとりでは生きられません。まわりのたくさんの人たちの協力を得たり、また自分も誰かのための役に立ったりしています。ですから、「ありがとう」だけでなく、時には「お互い様」だったりもしますが、みなさん、この「ありがとう」という言葉は惜しみなく使ってください。「ありがとう」のひと言は本当に人の心を変えるし、「ありがとう」を言った段階で自分の運や運気が変わると思ってください。「ありがとう」という言葉は人の心にすっと入って、相手は「いえ、どういたしまして」と思う。そのことで人間関係自体が非常にうまくいくと思います。また、「ありがとう」の言葉を通じて、「この人と一緒に頑張ろう」という気持ちがみなさんの中に湧いてきます。

今、多くの消えていった漫画家さんたちのことを考えると、この「ありがとう」の意識の少ない人が非常に多かったような気がします。だから、些細なことで編集さんともめたり、自分の評価が低いことに不満だったり、といろいろなことがあって、いつの間にか漫画界を去って行ったのではないかと思います。自分の運を開くのも閉ざすのも、すべて誰のせいでもなく自分自身なんです。自分自身の心にまわりに感謝できる気持ちがあれば、運はどんどん開いていきます。「ありがとう」と「ごめんなさい」は魔法の言葉、だと私は思っているんです。誰の心も溶かします。だから常に「ありがとう」。そうい

う気持ちを持って生きていると、どんどんいろいろな人とつながり、いつのまにか広々とした世界に出て行けるようになると思います。

みなさん、一番身近なところから始めてみましょう。まずお父さんやお母さんに「この世に生んでくれてどうもありがとう」という気持ちを持っていただきたいと思います。お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃん、そしてたくさんの先祖たちがいて、そうしたＤＮＡがつながった家系の最も先端に自分は今生きているんです。いろいろな人生を送ってきた先祖たちがいて、その人たちが子どもを産んで、その子がまた子どもを産んでと、ずっと続いてきた家系の代表であるという気持ちをもてば、また自分もいい人生を送り、次の子孫を残し、いい社会の文明を作っていこうと思えるはずです。こうした営みがすべて「ありがとう」という意識の中から生まれていくことができれば最高だろうなと思います。

私も常日頃から「ありがとう」の力を体験しています。細かなことを言うときりがありませんので、ここではあまり詳しくは話しませんが、毎日誰かに「ありがとう」。朝起きて空気が清々しくて気持ちが良かったら「ありがとう」。お水を飲んでおいしかったら「ありがとう」。それこそ人だけでなく、日々起きるさまざまな出来事についても「ありがとう」という意識をもっていると、これは断言できます、運勢は開けます。閉ざされることはありません。ですから是非「ありがとう」を常に連発してください。「ありがとう」はすべてを好転させる最高の言葉だろうと私は思っています。

太陽を拝む日本人

振り返って考えてみると、昔の人は何に対してもこうした感謝の意識をもって生きていたのではないかなと思います。

もうずいぶん前の冬の朝のことです。アイディアが湧かなくて、前の日の晩から徹夜していて、なんとかストーリーをまとめるために、朝の七時頃に近所の公園に向かって街の中を歩いていました。近くの店から、ガラガラとシャッターを開ける音がして、中からおじさんが出てきました。そして太陽に向かってパンパンと柏手を打って、一礼をしたんです。つまり太陽を拝んでいるんです。

それを見てはっとしました。そして、「あ、そういえば昔こういう光景をよく見たな。うちの父親もやっていたな」と思い出しました。私が子供の頃、うちの父親は床屋をやっていまして、朝早く店の扉を開けて、昇ってきたお天道さんに向かって、いつも柏手を打ってお辞儀をしていたんです。その時に父は、「お金を儲けさせてください」なんて拝んでいたわけじゃないですよ。太陽を拝んで、そういうことを思う人はまずいないですよね。父は、ただ太陽に向かって感謝の拝礼をしていたんです。つまり太陽に「ありがとさん」という思いを表現していたんですね。

そうこうするうちに、隣近所のおじさんたちも起きてきて、みんなが太陽に向かって柏手を打ち、拝礼をするんです。それは「いい天気でありがとう」だったり、「今日も元気です。ありがとう」だったり、大自然の営みのすべてに感謝する、その代表が太陽だったんだろうと、今は思います。とにかくそうやって太陽に拝礼してから一日が始まる。

私が育った頃には、それがごく日常に見られた光景でした。ですから、その冬の朝、「こういう光景は本当に久しぶりだなあ。長い間日本人はこうしたことを忘れていたのかもしれないな」と思いました。

太陽に対して「ありがとう」と一礼して、一日を始めるなんて、日本人はもともと精神レベルのすごい高い民族だったんですね。太陽のおかげで暖かい日の光にあたることができるし、すべてのものは太陽のエネルギーで生かされているということを、理屈ではなく、肌身で感じ取っていたからこそできる「ありがとう」だったと思います。自然に対して「ありがとう」を言える、そういう気持ちをもてること自体が本当に素晴らしいと思います。

ある時、漫画の取材で行った九州の田舎で、牛馬神社という神社を見かけました。「え、これ何だろう?」と思って、そこにあった看板の説明をじっくり読んでみると、昔、苦しい思いをさせて働かせて死んだ牛や馬を供養して作った神社なんですね。だからたくさんの牛や馬や名もない動物たち、人間のために働いてもらって亡くなった動物たちを「ありがとう」という気持ちでお祀りしているわけです。そこに昔の人の動物への思いやりや、慈悲のようなものを感じて、優しい気持ちになりました。今、狂牛病などいろいろな問題がありますが、感染病の疑いがあるといって、元気な牛を殺して埋めてしまう。その狂牛病も人間が作り出したようなものです。もちろん他の牛への感染を防ぐために必要なことだったのかもしれませんが、これをもし牛ではなく、人間におきかえたらどうなるのか。今の人間の心の何かが壊れているとしか、私には思えないですね。酪農家の方たちは本当につらかったでしょうね。あとから聞いた話ですが、そうやって死なせてしまった牛たちを悼んで供養したそうです。その話に少し救われた気がしました。牛馬神社を建てた昔の人たちとやはり同じ気持ちを持っていたんですね。

それから、みなさんも経験があるかもしれませんが、「針供養」って、聞いたことがありませんか。今でも時たま見かける風習で、今はミシンで縫い物をしますが、昔の女性たちは針でいろいろなものを縫っていました。そして古くなってしまった針をポイと捨てるのではなく、小さな針刺しに刺して「ありがとう」と言ってお祀りしたんですよ。こうした針供養だけでなく、たとえば料理人は庖丁の供養もしていました。

道具に対して「今まで一生懸命に働いてくれてありがとう」という気持ちをもって道具を供養する、あるいは牛や馬など人間のために役に立ってくれた動物のために「ありがとう」の気持ちを表せる昔の日本人は、今振り返ると、本当にすばらしい人間性の持ち主たちですね。私は、こういう気持ちをできるだけ蘇らせたいなと、ちょっと心の中で思っているところです。

鞍馬山で見た渦巻きパワー

ところで、ここから話は変わりますが、私はよく旅行をします。昔、あるところで不思議な体験をして、それ以来、日本はどういう国なのかなと興味をもって旅行に出るようになりました。今日はその体験についても少し話してみたいと思います。

一九八五年のことですが、春の社員旅行で京都の鞍馬山に行きました。『アマテラス』という漫画を連載しようと思っていて、ネタになるものがないかなとずっと探していた時なのですが、たまたまテレビで鞍馬山のサナート・クマラを紹介している番組を見かけたんです。サナート・クマラは鞍馬天狗と

も言われていますが、鞍馬山の御祭神として山頂の奥ノ院に祀られている神様です。このサナート・クマラは今から六百五十万年昔に金星から降り立った地球の霊王だという伝説があると番組では言っていました。六百五十万年前って「誰が見たんや」と、つっこみたくなりますが、ただ漫画家の私がふと心惹かれたのは、この御祭神が「永遠の十六歳の美少年の姿」をしているというところでした。「もうこれは行くしかない」とわくわくしながら、うちのアシスタントたちを連れて京都旅行に出かけました。会えるわけもないのにね。

鞍馬山の中腹に鞍馬弘教の総本山の鞍馬寺という大きなお寺があるのですが、そのお寺に入ると、お坊さんのお祈りの声が聞こえてきて、それが「地球の平和」や「地球の安泰」を祈っている。世界平和や日本の安泰ではなく、地球の平安を祈っている。これはすごいお寺だなとびっくりしました。アシスタントたちはこの段階で挫折して、まあ退屈したんですね。「先生、山に登りたいのなら、ひとりで登ってください。私たちは先斗町に遊びに行きます」と言って、皆、下山しちゃった。しようがないので、鞍馬寺に置いてあった鞍馬山について書かれた本を買って、ひとりで奥ノ院へ登って行きました。奥ノ院では大きな磐座の上に、鞍馬山の御祭神を祀っているお堂があります。残念ながら、十六歳の美少年には会えなかったのですが、春の陽射しがぽかぽかして、とても気持ちがよかったので、そのお堂の前のベンチに座って、買ってきた本を読んでいました。その本の中には、鞍馬山にはたくさんの種類の動植物が生息しているといったことが書かれていました。

本を読んでいるうちに、陽が当たって気持ちがいいだけではなく、不思議なことに体がどんどん軽くなっていくような感覚がしてきたんです。「なんだろう、この心地よくて、からだが軽くなっていく感

覚は……」と思ってふと目を上げると、地面から目に見えない螺旋状の渦のエネルギーのようなものが、ふわーんと柱のように立ち上っているのが見えました。地面のあちこちから目に見えない渦が柱のように、ふわーんふわーんと立ち上って、すーっと天に消えていく。

「え、この渦は何だろう?」と思った次の瞬間、考えたというよりも悟ったと言った方がいいのですが、「人間をはじめ、あらゆる生命は大地に育てられている」と感じました。大地というより地球といったほうがいいかもしれません。なぜかは分かりませんが、私たちはこの地球の底の底から出てくる目に見えない螺旋状の生命エネルギーによって、生かされ育てられている、そう直感したんですね。だから鞍馬山には動物や植物、昆虫など生命の種類が多いんだ、と思ったんです。それ以来、日本の聖地をよく旅するようになりました。聖地といわれる場所の中には、見えない螺旋の渦を感じるところがあって、そういう場所は本当に〝気〟がいい。周りの植物もよく育っていて、動物や昆虫も元気よく感じられる。疲れも癒されるし、ただいるだけで元気になるような気がします。昔の人は自然との付き合いが深いため、そういう生命力を活性化させる場所というものに敏感だったんでしょうね。ここは大事な場所だ、尊い場所だ、神の坐す場所だ、として祀り、そこが聖地と認識されて、のちに神社などになったんじゃないかな。今、パワースポットといって、古い神社などへ行きエネルギーをもらったり、癒されたりすることが流行っていますが、これも大地のもつ力を感じているのかもしれません。そこで皆が渦巻きパワーを感じているかどうかはわかりませんが。そんなわけで「本物の聖地」とは、地球の生命エネルギーの噴出するところ、霊性の元気回復の場所と私は考えています。

渦巻きエネルギー

その渦巻きなんですが、ふと気づくと、私たちのまわりは渦だらけなんですよ。たとえば私たちの頭のつむじも渦を巻いているし、指紋も渦を巻いている。ＤＮＡも渦巻き螺旋ですよね。木の蔓も、台風もつむじ風も竜巻も、あらゆるものが渦を巻きながら動いている。地球も太陽の公転面に対して二三・四度傾きながら太陽のまわりを回っているし、太陽系自体も銀河系のまわりを回っています。

赤ちゃんも産まれる時に産道から渦を巻きながら出てくる。渦巻きエネルギーの力によって赤ちゃんは生まれてくるのです。みなさんもお母さんのお腹から出てくる時に、記憶はないでしょうが、からだをぐるぐる回転させながら生まれてきたはずです。なぜか渦巻きのエネルギーで子どもが生まれてくる。これも不思議ですね。

『ガラスの仮面』と平行して描いている『アマテラス』という漫画の中に渦巻きのことをずいぶん描いています。今はちょっとお休みさせてもらっていますが、単行本が白泉社から出ていますので、機会があれば読んでいただきたいと思います。目に見えない渦巻きエネルギーというものが、宇宙や惑星や地上の生物や生命活動など、あらゆるところに働いているような気がしています。

みなさんも地方へ行く機会があれば、是非その土地の神社を訪れてみてください。政治的に作られた神社は分かりませんが、昔からある神社、古代の人たちが大切にしていた場所には何かあるような気がしています。

不思議な巨石

私の友人で、石の写真ばかりを撮る写真家がいます。彼がある時三年ぐらいかけて日本中の巨石を訪ね歩き、石の写真をたくさん撮りました。そうした場所のほとんどは聖地になっていたと聞きます。古代から多くの方たちがその石に対して尊い気持ちを捧げた場所なんですね。

彼は日本の巨石を撮り歩いた後、今度は二年間ぐらいかけて世界中の石の写真を撮って回りました。彼が撮った石の中には「どうして、どうやって、人間がこんなものをこんなかたちに積み上げたのだろう」というようなものもあるのですが、同じような石組が外国のある場所と遠く離れた日本にもあったりして、本当に不思議です。

沖縄の与那国島に、ムー大陸の跡ではないかということで一時マスコミを騒がせた、大きな神殿跡だとしか見えない海底遺跡があります。その与那国島のすぐそばに立神岩（たちがみいわ）という岩があって、大きくておもしろいかたちをしています。あるとき漫画の取材で淡路島の東南にある沼島（ぬしま）という小さな島を訪れたところ、沼島の海の側に与那国島の立神岩とそっくりな岩がありました。瓜二つです。これもやはり立神岩と呼ばれている。本当に不思議ですね。自然にできたものだろうけれど、どうして同じかたちのものが沖縄と淡路島に隣接した小さな沼島にあるのだろうかと思いました。与那国を調査している友人に沼島の立神岩の写真を見せたら、本当にびっくりしていました。

それから岐阜県は巨石の宝庫です。下呂市にある金山巨石群などは、古代の天文台ではないかといわれていますが、その大きさたるや圧倒されます。山岡町にも巨石群があって、これが自然にできたもの

なのか人工的なものなのかはわかりませんが、人間とのかかわりがあったことは確かだろうと思っています。広島県や兵庫県もすばらしい巨石の宝庫で、その大半は神社など聖地になっています。

未来に目を向けるのもいいのですが、足元になにがあるのか、古代の人たちが何を感じて、何に関わって、どんな精神性をもって、どうやって生きていたのか。ちょっと見方を変えるだけで、まったく違うものが見えてくる。そんな中に新たな発見があるのではないかと思っています。そこから次の未来が生まれてくるような気がします。

質疑応答

Q1　学生A（理工学部4年生）　スポ根漫画というとバレーボールやテニスなどのスポーツを題材として取り上げると思うのですが、『ガラスの仮面』を描く時にどうして演劇を選んだのでしょうか。

A　うちの母が映画が大好きだったので、子供のころからよく連れられて見に行ったのですが、そのなかに『王将』という映画がありました。それは天才将棋指しと言われた阪田三吉を描いた映画です。同じ監督がこの『王将』を三本撮っているんですね。戦前に撮られた一本目は、阪妻（ばんつま）と言われた阪東妻三郎さんが演じて評判になりました。二本目は辰巳柳太郎さんが、三本目は三國連太郎さんが阪田三吉を演じています。私が十歳の頃に見たのは三國連太郎さんの『王将』です。当時の映画はもうフルカラー

の時代だったのですが、なぜかこの映画は白黒で撮られていました。主人公の阪田三吉は大阪の下町の長屋に住んでいる、何の力もないおっちゃんなのに、ただただ将棋だけは天才なんです。名人なんですね。そのほかすべては「あいつはだめだ」と言われているような人で、女房の小春が彼に愛想を尽かして、子どもの手を引いて家を出て行くシーンもあります。

将棋のほかは何もできないけれど、たったひとつのことに夢中になっている、その阪田三吉という長屋のおっちゃんの生き方を映画で見ていて、当時十歳の私は喉がカラカラになってきました。その時初めて人間というものに興味をもったんですね。それまで見ていた映画は勧善懲悪の内容が多かったのですが、阪田三吉の生き方を見たことで、「何だろう、これは。どうしてこんな人間がいるのだろう?」という思いがずっと心の中に残って、それが、「いつかこういうキャラクターを描きたい」と思うようになったわけです。

新連載を始める前の打合せの時、私は編集長に阪田三吉みたいなキャラクターを主人公に描きたいと言ったんです。あとは将棋のかわりに何をもってくるかです。デビュー当時からのおつきあいだった編集長は、もともと「あなたの性格はスポ根に向いている」と言っていて、私が高校三年生の時には「バレーボールの漫画を描きなさい」と言ったりもしていました。その時に私はバレーボールの漫画ではなく演劇の漫画を描いていたんです。つまりスポ根のノリで演劇をやる女の子の話を短編で描いたのですが、それに対する読者のアンケートがとてもよかったんですね。今にして思うと『ガラスの仮面』の前身みたいなものです。そういうこともその編集長は覚えていらっしゃったんだろうと思います。

「まあ、そういうキャラクターならおもしろいから、是非やりましょう」ということになったのですが、

私はお琴の音色が好きだったので、お琴を弾く女の子を描きたいと言うと、「お琴？　美内さん、漫画で音楽はダメだよ。どんなに素晴らしい名演奏のシーンを描いても誰も聞けないでしょう。しかもお琴は座ってばかりだからおもしろくないね」と編集長に言われてしまいました。それからふと閃いたように、その編集長が「演劇、どう？」と仰ったんです。演劇なら動きもあるし、芝居によって衣装も変わる。少女漫画にピッタリでした。私も以前に描いた漫画を思い出して、「あ、それはおもしろい。それでやりましょう」ということで、演劇をテーマに選びました。

その時はまさかこんなに長く続くとは思っていなかったものですから、非常に軽いノリでした。演劇なんてやったこともないし、少し見たぐらいだけど、まあいいやと。「主人公の北島マヤと一緒になって演劇の勉強をしながら描いていけばいい」と思ってスタートしたんです。もともとスポ根漫画が向いていると編集長に言われていましたからね、まあ、スポーツの代わりに演劇になったと思って下さい。

Q2　学生B（法学部2年生）　デビュー前に「自分は絶対に漫画家になる」と信じて疑わなかったというお話がありましたが、その根拠になったものは、自分がそれまでに払ってきた努力だったのか、あるいは自分の才能への認識だったのでしょうか。

A　そこが不思議なのですが、何でしょうね、別に自分にそれほど自信があったわけではないんですよ。さっきも言いましたように、自分の絵にコンプレックスをもっていたりもしました。だけど、きっと私自身に他に選択肢がなかったんでしょうね。だから挫折するなんてことは微塵も考えなかったのだと思います。「ああ、よくなれた」というのはありましたし、後から考えると冷や汗ものですが、なぜか「きっ

となれる！」と思っていました。理屈はありません。「明日の朝になったら、きっと太陽が出る」と信じているように、「私はきっと漫画家になれる」と信じていました。それだけでした。

Q3　学生C（法学部修士1年生）　およそ四十年間の漫画家人生を送ってきた中で、漫画家以外の職業の方がいいのではないかと思ったことはありますか？　あるいは今後のビジョンはお持ちなのでしょうか？

A　私は十六歳でデビューしましたので、都合四十四年間ぐらい漫画の世界にいます。一度も漫画家をやめようと思ったことはないのかというと、実はそんなこともないんですね。十八歳で高校を卒業した時のことです。当時は大学に進学する女性は少なかったのですが、うちの親は「大学に行きたいなら行ってもいい。就職したいなら就職してもいいよ」と自由に選択させてくれていました。私はとにかく漫画家になりたかったので、「進学なんてとんでもない。絶対に漫画家になる」と思ってました。十六歳でデビューしてから、学生漫画家として何作も作品を描いて月刊誌に出していたんですね。

ところが高校を卒業する時にふっと「私はこのままでいいのだろうか」と思ったんです。どうしてそう思ったかというと、「こんなに人生経験が少なくて、漫画の世界に飛び込んでいいのかな」ということです。私は社会を何も見ていない。社会の動きや構造、会社の組織がどういうふうに動いているのかなどを何も知らないまま、漫画家になってもいいのだろうか。おまけに漫画家は孤独な作業で、部屋の中でコツコツと漫画を描くだけですから、「これでは人間としてまずいんじゃないかな」と感じていたんです。

そこで高校卒業と同時に、もちろん漫画も描くけれど、ちょっと就職もした方がいいんじゃないかな

と思って、実はこっそりと就職試験を受けました。ちょっとほかの社会も見て勉強しなければまずいなという気がどこかにあったわけです。受けたのは広告代理店で、ひとりぐらい下働きの女の子がいてもいいという感じでの募集だったと思うのですが、そこに受かりました。ところが、さあ今日から会社に出社だという日がちょうど漫画の締め切りと重なったんですね（笑）。最悪ですね。しょうがないので、せっかく雇うと言ってくれた社長さんのところに謝りに行ってやめさせてもらって、それっきりになりましたね。後にこの話をしたら編集長から大笑いされました。

だから迷いがなかったわけではありません。でも漫画がいやだからやめたいと思ったわけではなくて、自分のこの先の未来がこのままでいいのかなと疑問が湧いたので、ちょっとほかを見てみたかったということです。

長い間漫画家をやっていますと、多少くたびれてもきますが、ほかのことをやりたいとはあまり考えてはいなくて、今はまあこれしかないのかなと思ったりしています。もっとも今もほかにもやりたいことや好きなことはたくさんありますが……。

そして漫画家としての未来のビジョンということで言えば、今感じているのは、これから世界中で日本の漫画がもっと大きくなるだろうなということです。海外に行くと本当にそれを感じるんですよ。アジア圏では台湾、韓国、インドネシア、タイなどからよくファンメールが届きます。イタリアの七〇代の女性から「私が死ぬまでに結末を見たい」と切実なメールが来たことがあります。おもしろいですね、反応が日本のファンとまったく同じです。かつて漫画が日本の中で大ブームを起こしたように、これからもっと大きなブームが世界中で起きてくるような、そんな予感をちょっともっています。

もうずいぶん昔ですが、はじめて台湾でサイン会をやったときのことです。台湾で『ガラスの仮面』を出してくれている出版社の方が、「台湾の人たちはあなた方の漫画を読んで日本を好きになる」とおっしゃってくださったんです。当時、台湾では漫画だけではなくJ・POPも盛んでした。そういった日本の文化を通して台湾の人たちが日本をとても好きになってくれる、それがすごく嬉しかったですね。日本の読者に向けて一生懸命に描いていたものが、外国の方々も読んで『日本』を好きになってくれる。こんな嬉しいことはありませんね。いまのところ海外に出ている漫画はほんの一部にすぎませんが、もっと多くの作品が世界で読まれるようになればいいなと思っています。将来、漫画を通して国際親善のようなことができるといいなと思っています。

Q4　学生D（法学部1年生）『ガラスの仮面』のファンとしての質問なのですが、『ガラスの仮面』には劇中劇というかたちでいろいろな作品が出てきます。美内先生が描きながら最も思い入れがあった作品はどれでしょうか。

A　最初は『若草物語』や『たけくらべ』といった原作のある劇中劇を使っていたのですが、だんだんとネタが切れてきてしまいまして。そこで、将来自分が漫画で描こうと思っていた原作をどんどん『ガラスの仮面』の劇中劇として投入し始めたんですよ(笑)。つらいですね。これで連載が何本かふいになっているんです（笑）。

そのなかで読者にとても人気のある劇中劇があって、たとえば『女海賊ビアンカ』は学園祭で演じたとか、ひとり芝居で勝手にやったという人が結構たくさんいます。びっくりしますよね。どうやって演

じたのだろうかと思います。名古屋で若い女優さんがひとりで演じられた『女海賊ビアンカ』はなかでも話題になって、新聞記事になっていたのを読者の方が送ってくださいました。『女海賊ビアンカ』は劇中劇では描き足りない部分がたくさんあるので、いずれちゃんとした漫画作品として書き直したいですね。

もうひとつは延々と出てくる『ふたりの王女』という劇中劇ですね。これは主人公の北島マヤと姫川亜弓が舞台の上でライバル意識を燃やして演技をすることをテーマにしています。昔、エリザベス一世と彼女の血縁関係にあたるメアリー・スチュワートというふたりの対称的な女王の話を読んで、「これを舞台化したらおもしろいだろうな」と思っていました。その時はまだ舞台化ということを考えていなかったのですが、漫画に描こうと思って、キャラクターの性格設定や物語の結末まで細かくきちんと書いておいたのです。そして『ガラスの仮面』が終わるか、あるいは連載中に、どこかで連載しようと思っていました。最低でも二年間は連載したいと思っていたのですが、なかなかその機会がなくて、マヤと亜弓を対決させる舞台を何にしようかといった時に、ついにそれしかなかったんですよね（笑）。もう悲しい。ですからこれも描き足りなくて、どこかで描いてやろうかなと考えています。でも、読者はみんな結末を知っていますからね。困ったなと思いながら、聞かれると「あれは悔しい」といつも言っています。

反対にお聞きしたいのですが、何か気に入った劇中劇はありますか？

学生D　僕は『忘れられた荒野』の「オオカミ少女ジェーン」が好きです。

A　実はあれも読み切り用に取っておいた作品なんですよ（笑）。あれも残念だなあ。

Q5　学生E（社会学研究科修士2年生）　私事で恐縮なのですが、私は来春から漫画の編集者として

働くことになりました。そこで、良い編集者と悪い編集者とはどういうものか、あるいは編集者はかくあるべしというポイントがありましたら、是非勉強させていただければと思います。

A　これはたいへんな質問ですね。良い編集と言っていいかどうかは分かりませんが、私がデビューした時の編集長は後に少女漫画界三大名編集者のひとりとして名前が挙がっている方です。彼は多くの漫画家を育てました。ヒット作を描く作家さんをたくさん世に出して、少女漫画にスポ根もののバレーボールの『アタックNO．1』を描かせたり、人によってはちゃんと性格を見て、「この人にはこういうものがいいだろう」というサジェスチョンをしたりしていた方です。

まず彼は漫画家以上に勉強をしている編集さんでした。何か聞いても知らないことはないし、「最近私こういう本を読みましたよ」と私が言った時にご自分がその本を知らないと、私が次に編集部に行く時にはその本が必ず置いてありました。だから常に自分よりも一段上を行っているという感じがあって、この人の言うことは真面目に聞いておこうと思いました。それからどういう漫画がおもしろいか、おもしろい漫画を描くにはどうすればいいかということを常に考えていて、新人を育てることにとても熱心な方でした。だから何か嫌なことを言われても、きっとこれは当たっているなという感じがいつもあったんですよね。当時、集英社の中で少女漫画はそれほど売れていなかったのですが、月刊誌で百五十万部まで売り上げを伸ばした方です。その方が当時の集英社の社長さんに言われて、子会社の白泉社を創って、そこでもいろいろな雑誌を創刊させ、話題作を発表していきました。もう定年退職されていますが、今もその方には私は頭が上がりません。

そこまでいかなくても、良い編集さんというのはとにかく作家をのせてくれる編集さんですね。自分

がおしゃべりをするのではなく、漫画家さんの話をよく聞いてくれる人です。これはもう聞き上手に徹した方がいいです。漫画家さんが喋ることを本当におもしろそうに聞くと、もうどんどんのってきますから、連載もはずんでくるんです。だから聞き上手に徹して、片一方で人知れずせっせと本を読んだり勉強をしたりしている編集さんが一番いいですね。で、漫画家さんが「どうかな、このアイディア」という時にぽんと何か言えるような、そういう編集さんが一番ありがたいですね。

これは私だけではないと思うのですが、「うーん、この編集さんと付き合っているといい作品が生まれないよね」という編集さんとは自己主張の多い人です。一番ダメですね。「あなたの作品じゃないんだから」と思ってしまいます。なかにはアイディアまでいかない、意見の出し過ぎという人もいて、この場合作家さんがなかなか伸びていきません。気付かないうちにみんなから疎まれるということがありますので、気をつけてください。

是非漫画家さんと良い関係をつくって、いい名作を生み出してください。頑張ってください。

Q6　学生F（経済学部4年生） 漫画家という道を究められた美内先生に、何かひとつのことを続けていく力やモチベーションを教えていただきたいと思います。

A　う～ん。まあ、あきらめないことでしょうかね。『ガラスの仮面』も途中ちょっとくたびれて、少しお休みさせていただいて日本中を旅していたこともあるのですが、でも連載は自分の中で決して終わったとは思っていなくて、続きはちゃんとあるんです。だから本当に単純な答えになってしまうのですが、やっぱりあきらめないことですかね。作者のなかには連載をやっていても途中であきてしまう人が時たまい

ます。この連載の続きはどうなるのかな？　と思っていたら、尻すぼみでぽんと終わってしまって、また次の作品を描き始めてしまうという方もいるのですが、私はあまり飽きていません。だからごめんなさいね、あまりいい答えにはならないかもしれませんが、あきらめないこととしか言いようがないですね。

Q7　学生G（法学部1年生）　劇中劇『紅天女（くれないてんにょ）』のなかの梅の谷の描写が本当に神秘的で大好きなのですが、『紅天女』のストーリーをどのように思いつかれたのでしょうか。

A　連載を三十五年間、『紅天女』で引っ張ってきましたからね（笑）。どんな物語かみなさん期待していると思います。『ガラスの仮面』の連載を始める時に、主人公たちが最終的にめざす芝居はどういうものにしようかなと考えて、絶対に人間の役はやめようと思ったんですよ。本当は『夕鶴』のような芝居をやりたいなと思っていたんです。

どうして人間にしたくなかったかというと、たとえどんな役でも演じられるじゃないですか。人間だから。だけど人間ではないものということになると難しいですよね。そんなことを考えていた時に、本当にふっと何の脈絡もなく「……天女」という文字が頭に浮かんだんです。「あ、何かの天女さんがいいな」と思った次に「紅（くれない）」という文字がぽんと浮かんで来たので、「紅天女」というタイトルにしました。その時はまだ何のストーリーも考えていません。ただ映像がぽこっと浮かんできただけです。よくこういうことがあるんですね。

その映像は、着物の帯の位置が腰のところにある姿で、長い髪を額の真ん中から分けた少女が、枝垂れた花の木のそばに佇んでいる絵です。「あ、これにしよう」と思いました。最初は桜の精もいい

なと思ったのですが、それではあまりに普通すぎるので、梅の木の精にしようと。タイトルの「紅天女」から紅梅の精。ただの梅の木の精ではありきたりなので、千年の梅の木の精にしようと考えました。その一枚の絵とタイトルだけが浮かんで、そこからスタートしたんです。その浮かんだ絵についてよく考えてみると、着物がそんなふうですから、時代考証的には鎌倉時代か室町時代ぐらいだろうと思って、そのあたりに設定しました。イメージとして浮かんだものをだんだんと物語にしていくかたちで生まれました。そして連載を始めて六、七年目ぐらいに具体的に、千年の梅の木を切って仏像を造る仏師と千年の梅の木の精の恋物語にしようと決まりました。

Q8　学生H（理工学部4年生）　お話の中で焚書坑儒に例えられたエピソードがありましたが、現代でも漫画というものは読んでためになるものというよりも、やはり遊びの道具としてとらえられているように思います。つまりその当時から日本人の認識はあまり変わっていないように思うのですが、それに対してどうお考えになりますか。また、この先漫画そのものは娯楽のツールとしてその道を走っていくべきなのか、あるいはもっとメッセージ性をもたせていくべきなのかなどのご意見もお聞かせください。

A　私は、表現は自由でいいと思っています。だから、読んでためになるものばかりがいいわけではなくて、思い切り大笑いして楽しめるものがあってもいい。私自身が考えるストーリー漫画の原点はあくまで楽しむべきものであるということです。だから読者をワクワクさせたり、ハラハラさせたりしたい。また小説も同じですが、漫画の物語を通して疑似体験ができます。そういう気持ちで漫画を楽しんでもらえるのが、本当は私にとっては一番にいいと考えています。

最近、小林よしのりさんがご自分の思想的なことを漫画で描いていますが、これも分かりやすくてヒットしています。またいろいろなノウハウを描いた漫画や歴史を描いた漫画もある。これはこれでおもしろいなと私は思っているんですね。『三国志』なども長編の漫画で描いてあって分かりやすくていいと思いますし、とにかく何でもありだと思います。その中で読者が何を取捨選択していくかということであって、それは読者にまかせるべきでしょう。その中で生き残っていく作品と流れていってしまう作品とがあると思いますが、どんな表現方法でもいいと私は思っています。

Q9　学生I（法学部2年生）　先ほど演劇をマヤと一緒に勉強していこうと思ったとおっしゃっていましたが、本を読んだり、演劇を見たりするだけでなく、実際にご自身で演じられたことはあるのでしょうか。

A　実は一回だけあります。ずいぶん昔、二十年ぐらい前のことでしょうか。小説家の方たちが演じる文士劇と同じように、漫画家さんを集めてお芝居をしようという企画をした人がいました。文学座の、当時とても異彩を放っていらっしゃった演出家の方が演出をして、萩尾望都さんや楳図かずおさんをはじめとしたいろいろな漫画家さんたちがお芝居をやりました。私はピーターパンの役をやったんです（笑）。すごいでしょう？　今から振り返ると「恥ずかしい」のひと言ですけれどね。でも本当にいい思い出になっています。演出家の方がピーターパンだから吊して上空を飛ばそうかと思っていたらしいのですが、それをやっていたらロープが切れていたかもしれません。

しかもこの時の経験がおもしろかったんですよ。正月早々に下北沢の本多劇場で公演をやることになっていたのですが、漫画家さんはみんな時間が取れません。文学座の人たちは、年末の忙しい時に私

たちを鍛えようと思って稽古場に集まっているんですが、漫画家さんたちはといえばバラバラに来る。結局全員が集まったのは初日の前の日だけでした。

実際に演じさせていただいた時にすごく思い知ったことが、「ああ、漫画のように自分の姿って自分では見えないんだな」ということでした。後で写真を見て、「ああ、こういう台詞を言った時にはこういう格好をしていたんだな」と分かる。それはそれで私にはいい勉強になりました。

ただ、漫画家さんはみんなわがままなんですね。しかも売れっ子ばかりのストーリーテラー揃い。日頃から物語をつくっていますし、編集さんからも「今、ここでこういう台詞を言っているけれど、次にこういう場面になって、これは矛盾していないか？」とか言われることもあるわけです。そういうふうに鍛えられている作家さん達ですから、文学座の演出家の方が書かれた台本を読んで、「これ、ヘンよね」とみんなが言うわけです（笑）。「この台詞をこの人が言うのはおかしい」とか。困ったと思いますよ。最初はそのたびにいろいろと直されていたのですが、そのうち落ち込まれたみたいで（笑）。「とにかく最初の通りにやってください」ということになりました。

私も台本についての疑問はいろいろとありました。私はピーターパンの役で、十代の女の子です。いっていても十六、七歳です。ちょっと痴呆気味で、車いすに乗っている自分の母親と対面するシーンがあるのですが、対面する母親が六十代なんですよ。「一体いくつで産んだの？」ってことですよね（笑）。まずそういうところから脚本家と話をしていったのですが、「どうしてもこの年齢でないとダメ」ということで、「すごいなー。そうするとこの人は五十代で私を産んだのか」と思ってやっていました。ちなみにその母親役をやったのは花村えい子さんという大先輩の漫画家なのですが、花村さんとお会いす

ると未だに娘よばわりされています。そんなことで楽しんでやっていました。

Q10　一般参加者A（塾員）　渦の研究についておうかがいしたいと思います。私も社会人になる前は、親やまわりの人たちからその渦のエネルギーを享受する立場にあったことが多いと思うのですが、働き始めてから、私自身も小さくても渦を発生させて、それを社会に還元させて、人に渦を与える立場にあるのかなと思うようになりました。そのことに関して先生のお考えをお聞かせいただければと思います。

A　渦に関してはちょっと難しいことがあるのですが、あなたのおっしゃる『渦』は、比喩というか、社会的な意味合いですね。今の社会で、無駄な人は誰一人いないと本当に私は思っているんですよ。みんなが小さな歯車で、それがカチャッとまわったら、その隣の歯車もカチャッとまわり、それがどんどんと他の歯車を動かして、もっと大きなものが動いていく。気付くと全体が大きな動きになっている。だから、みなさんもこれから社会に出られた時に何らかの発信役をやっていくのだろうと思います。自分の与えられたことは小さなことかもしれませんが、一人ひとりが一生懸命にやっていることが大きなところにつながっている。だから是非がんばってください。そういうことを意識して、「ありがとう」の気持ちをもっていると、もっと大きな仕事がやってくると思います。私も四十四年間、出版の世界で生きていて、本当に「ありがとう」の力の大きさをつくづく感じています。これはみなさんが社会に出て、それをどんどん実践し始めた時に初めて感じることだろうと思います。

Q11　一般参加者B（慶應義塾大学中途退学）　『ガラスの仮面』の主人公の名前は「マヤ」というカタ

カナですが、先生が作品を描かれる時にキャラクターにつけられる名前には何か思い入れやひらめきなどがあるのでしょうか。

A　これも感覚でしかないんですね。実は中学二年生の時に、将来漫画家になった時のために「名前リスト」というのを作っていたんですよ。キャラクターの名前をたくさん書いてたんですね。たとえばきついライバルだったらこういう名前にしようとかね。その中にマヤというのがあってお気に入りでした。この名前はいつか長い連載をやる時に主人公の名前にしようと思っていたんです。中学2年生のときにね。

それからざっと十年くらい経って、『ガラスの仮面』の連載を始めるときに、「よし、〝マヤ〟を使おう」と思ったんですね。どんな漢字にしようかといろいろと考えたのですが、どうもピンと来ないので、カタカナの「マヤ」にしました。じゃあ名字をどうしようかなと思って考えていた時に、そばにあったラジオから北島三郎の演歌が流れてきた（笑）。私、サブちゃん好きなんですよ。「あ、北島三郎……北島マヤ。うん、これでいこう」と安易に決まりました。あの時、別の方の歌声が流れてきたら、また違う名前になっていたかもしれません。

「北島マヤ」という名前でずっと三十五年間連載を続けているのですが、ある姓名判断の方に「美内さん、あなた、とんでもない名前を主人公につけましたね」と言われたことがあります。「え、どうしてですか？」と聞くと、「大凶ですよ」と言うんです。「えー、これ大凶ですか」と聞いたら、そうだと。とにかく不幸と貧乏が一緒になってやってくる、人生なかなか浮かばれないキャラクターだと言われました（笑）。ふと振り返ると、そうかもしれませんね。そういうことがキャラクターに影響するのかどうかは分かりませんが、今は「北島マヤ」で何とか幸せにしてやりたいと思ってやっているところです。

テレビを見ていても「この人の名前おもしろいな」「こういう名前をつけると、いいキャラクターができるかな」というふうに思うことはよくあります。一時、宝塚のパンフレットを見ていて、みなさん芸名がすごいじゃないですか、さすがにこれをやったらまずいなというのはあるのですが、ここからもいいヒントはいただいています。

でもね、名前って不思議で、キャラクターの絵を描いた時にぱっと決まる時があるんです。「月影千草」もそうです。絵のイメージとあっていて、何だか理にかなっているなあと思います。漫画ですから、名前も文字にして書くわけですが、その名前と絵を見た時に、絵と違和感のない、マッチした名前を考えるように心がけてはいます。だいたい絵を描いた段階ですっと名前は決まりますね。

最後に、社会に出たら嫌な人に出会うことも多いと思いますが、覚えていてください。

「ありがとう」と「ごめんなさい」は魔法の言葉。

特に「ありがとう」は、使えば使うほど人生は良くなっていきます。気付かないうちに自分を取り巻く環境が変わっていきます。日々「ありがとう」を心がけてください。毎日何十回と「ありがとう」を口にするうち、何年か後には「ありがとう」が口癖になって、まず自分自身が変わっていきます。不思議ですが、否定的な言葉がまず出なくなる。いつも笑顔が当たり前になって、自分に好意的な人間が周りに集まるようになる。その「ありがとう」がどんどん貯まって、ある日、どん、と運が開けるようなことがおきる。ほんとなんですよ。「ありがとうの法則」みたいなものがあるんです。まずは身近な人や物から「ありがとう」を始めてみてください。「ありがとう」は魔法の言葉。覚えていてくださいね。